

「日本医事新報」別刷（三五五八号）

平成四年七月四日発行

薬舗遊佐一貫堂小史

村
主
巖

薬舗遊佐一貫堂小史

村主殿

昨年の十二月八日は、太平洋戦争開戦五十年目の日に当り、マスコミの構成にのつて私の胸も波立った。あの直後は天と地が逆になるほど価値観が変わった。しかし、嘗てない非常の時であり、ものさしがはつきりしているだけに、惑乱はあったが、哀傷は少なかつたように思う。

それに引きかえ、光彩を放っていた存在が、いつか影を曳くようになり、次第に時の流れに削り取られ忘れられていくといった評価のされ方は、その存在が嘗て陸離としたものであり、コミュニティへの密着と献身が目ざましかった存在であればあるほど、ふと気づいた時の哀感は大よさうもないほど大きい。

そのような盛者必衰の無常の流れに立つて、幕末以来続いた地元のある薬屋さんの小史を述べてみたい。

遊佐一貫堂という薬舗が塩釜にあった。本町と門前をつなぐ、お釜社から塩釜神社裏坂に抜ける道を一貫堂横町と呼び、その東側の中ほどあたりに、平土間からすぐ高台の畳敷に続く店構え。屋根に金文字で縦長に大きく「さふらん湯」、その両横に夫々小文字で、「ちの道の薬あん産の妙方」「調

整本舗陸前塩釜一貫堂」と書かれた看板を掲げる薬舗であった。

それが、終戦後いつの頃からか——昭和三十五、六年あたりか——賑わいのある横丁を離れて、裏参道の鳥居奥の土蔵造りの場所に店が移った。昭和四十年代の初め塩釜医師会史編纂の際に、何か関連ある資料の提供をとお願ひしたが、格別の協力は得られず、もう一押しすることも何となくためらわれるといった態度で、そのままになった。

それから十五年ほどを経たらうか、塩釜西郊にある私の診療室の南側の窓から見える古い二階屋の裏壁に、新しくカマボココタンが張られ、さふらん湯の看板文字が大きく墨書された。表にさほどの店構えはなかったが、神社裏参道沿いの一貫堂が廃屋になったことからみても、一貫堂は一家をあげて、中心街から西郊の野田まで移って来られた模様であった。

それから何年経ったろう、五年ぐらいの歳月であつたらうか。この色々の臆測をこめて頭にもやっていたさふらん湯の文字が脳裏だけのものになる日が来た。診療室の窓の眺めから、或る日、突然、トタン板の看板文字が消えていたのである。郊外に近

いこの二階家にも定住は出来ず、更に先を探して、旅装をあらためて去つたものであろうか。

日本東洋医学会東北支部が設立され——支部長は山形大学・石川誠教授——、それを記念して、昭和六十年八月十七日に第一回の東北地方懇話会がホテル仙台プラザで開かれた。その際、東洋医学会長の室賀昭三先生が「一貫堂医学」について講演されたが、その終りに近く、「仙台近郊出身の方で、遊佐大薬という医師は一貫堂医学に深い関係のある方である。御存知の方は是非教えていただきたい」という一節があつた由である。私は出席していなかったが、聴いておられた沖津・県医師会会長が耳に留め私に問い合わせがあつた。

一貫堂医学と遊佐姓、仙台近郊、この三つを関連させると、塩釜の薬舗、一貫堂の遊佐家が浮上してくる。

難解な文字や字義に精通しているはずの漢方医学者が、つい先年の明治期漢方医の名前を耳でだけ記憶しているというものは理解に苦しむところであるが、遊佐大薬はひよっとすると遊佐快真の間違ひではないかと思ひ、快真に関する、これまで調べて得た明白な部分と、確からしい推測部分とを、温古堂室賀医院の室賀昭三先生あてに書信としてしたためた。以下は、その要旨である。

▲遊佐快真・幕末の頃、塩釜またはその周辺に生れ、江戸に出て漢方医となり、産婦人科を専門としたが、何時の頃からか塩

釜に帰り、医院及び薬舗をいとなみ盛業し、その創製した「さふらん湯」は婦人の病に卓効ありとして評価が高かつた。

快真はまた、明治初年、塩釜港の衰微した頃に塩釜にあり、町民代表として、戸長菊池雄治と共に力を合わせ、町民から金と労務をつのり、町民また等しく呼応して、浅瀬になり、あたこ(温こ)川と言われるようになった塩釜湾の航路を浚渫すると共に、再三県に願ひ出て、築港工事を促進させた。そして、明治十七年、旧国鉄塩釜線塩釜駅のあたりに、初めて突堤をつくることに官を動かして成功した。そして、この第一次築港竣工を期に、ここを資材の揚陸場として、明治二十一年に東北線仙台—上野間が開通し、またこれが動因となつて、塩釜を起点とする三陸汽船株式会社が誕生し、岩手県三陸沿岸と交通することになった。

快真は、築港工事の功労者として、時の県知事から表彰されている。

快真の次の世代を寿助と言ひ、この人も漢方医であつたらしい。彼は、明治二十年代、前宮城病院長の赤星研造が塩釜に出張診療所を開いた際の世話役になつていて、これを、当時の新聞が報じている。

昭和八年発行、菊田定郷著の『仙台人名大辞典』には快真について、僅か三行ではあるが記載があり、「塩釜町の産科医、さふらん湯を創製」とだけの内容である。

姓の遊佐から推して、秋田県南か山形県庄内地方から先祖が出ていのではないかなうか。

最近まで、薬舗一貫堂の神棚に無造作な風情で、さふらん湯の製法を書いた紙がのっていたそうである。▽

これに対し日ならずして、思いがけなく高名な漢方医学者、温知堂矢数医院・矢数道明先生からお便りがあった。転載する。

△(前文略) 小生等の恩師・下谷一貫堂の森道伯先生について、先生逝去後、家族親戚などの記憶を蒐集して、森道伯先生伝、一貫堂医学大綱をまとめました。この度の報告により、森道伯先生の師は、遊佐太素とされていましたが、「快真」ということを知り驚きました。恩師の三回忌にあたり、家兄矢数格が出版しました森道伯先生伝の中の関係部分をコピーしてお送り申し上げました。何らかの参考になると存じます。

この度の御報告は将来のための貴重なものとして悉く保存し、そのうち一貫堂現当主にもごらんに入りたいと存じます。(後略)▽

昨年の孟蘭盆すぎ、医薬品卸問屋S社のS氏が訪ねて来られて、一貫堂遊佐家に関する資料の数々をご提供いただいた。

S社は、一貫堂商品の金看板であったさふらん湯の製法及び販売権の譲渡を受けた会社で、氏は、そのさふらん湯部門の責任者である。由緒ある漢方名流薬品であるさふらん湯の製造を手がけるにあたって、その技術の詳細は勿論のこと、創製本舗である遊佐家の承譜を得心の行くまで調査されたものようである。

その資料を取捨考按して筆をすすめると、以下のようなになる。

遊佐家の出自は平氏の流れをひく畑山氏で、出羽国遊佐郷平津に住んだが、兵乱に遭って鳴子尿前を開拓して住みついた。これは『安永風土記』にある由。開拓に功を成した遊佐氏は、ここに大庄屋として十四代まで住みついた。この遊佐平佐衛門平信安という第十四代目の嫡男を快真と言ひ、後に快真信勝と改めた。この人が陸前塩釜町に住んだ遊佐家の初代であり、産婦人科医で、一貫堂の始祖となった。

この快真信勝から塩釜市の臨濟宗願成寺が菩提寺となっている。その墓誌銘から累代を辿ると、次のようになる。

- 初代 快真信勝 天明二年(一七八二)生 天保八年十一月十五日没 五十五歳
- 二代 快真信高 文化十一年(一八一四)生 明治二十四年七月十一日没 七十七歳
- 三代 寿助 弘化二年(一八四五)生 大正六年五月十五日没 七十二歳
- 四代 寿助 明治二年(一八六九)生 昭和十九年十月二日没 七十五歳
- 五代 寿助 明治三十七年(一九〇四)生 昭和四十七年八月二十九日没 六十七歳

初代快真は京都の名医賀川子女の秘伝を伝えた産婦人科医で、藩主から長柄の駕籠を用いることを許され、四方の招きに応じたいし、産婆を養成すること数千人にのぼったという。その居宅は塩釜神社裏参道門前にあった。

塩釜神社別宮は、塩土翁という製塩の神をまつる。塩は生命に欠かせぬもの、また

當時は出産と潮の干満と関係ありとされていたので、祭神は直接お産と関係ないが、この神社が安産の神となったとしても、さほど不思議はない。天明八年(一七八六)の古川古松軒の『東遊雜記』に、この神社が安産の守を沢山出していたことをうかがわせる記述がある。「この社より 安産の守、痘瘡の守出る。これを塩釜の守りとて諸人信仰するなり」と記している。

初代快真は天明二年(一七八二)の生まれである。京都に出て修行したのち、産科開業の地を求めた。当時の医術の中にあっても、心身医学的要素のかなり濃い、この産科学の施術に、神徳の力にすぎたことを考えたことと、郷里鳴子に近かったこと、この二つが、この地、しかも神社参道門前を卜したことの理由であったらう。「ちの道の薬、あん産の妙方、調製本舗陸前塩釜一貫堂」とし、婦人と老翁の木版画を配した、さふらん丹さふらん湯という和漢薬も創製し、全国に宣伝した。自分の数千にも及ぶ産婆のほかに売子をも使ったという。全国的知名度は実母散、中将湯と並んだ。

この初代快真は天保八年(一八三七)に没したが、二代目快真が天明四年(一八一四)に生まれている。二代目快真も同じく産婦人科医となったが、初代創製のさふらん湯の全国的な流通経路のつて、塩釜と江戸(東京)との間は日常茶飯事のように往来していたのであろう。

矢数格先生著の『森道伯先生伝』(昭和八年八月刊)には、△明治漢方の大家森道伯は明治十五年(一八八四)に「仙台産科の名医遊佐太素(ママ)先生」の東都に来るありて其の門に入る。されど先生家累を扶養する重責あり、加ふるに当時將に漢方医撲滅運動其の極に達し、為に居る事三年にして、一時師の許を辞し(後略)△とあるから、少なくとも明治十五年から三年ぐらいの間は、浅草蔵前で産婦人科医の門を張っていたことになる。

しかし、この明治十五年から十八年までは、塩釜に於ける築港工事を、村民代表としての立場から戸長と共に、全村民を督励して当っていたのが快真であった。当時の塩釜村は、明治御一新で貞亨の特令という藩政時代の保護政策が廃止されていたし、慶応三年の大火により受けた打撃から立ち直れずにあつたし、明治十二年には仙台湾北寄りの鳴瀬川河口野蒜に、内務省直轄で築港工事が開始されるといふ悲観的事態もあり、危機的状況にあつた。

ともかく、築港工事への県からの助成を可能にすべく、前段階での村民挙げての努力の指導者であった。幸いにそれが功を奏し、県は十五年に工事に着手、十八年には海面の埋立てが完成して第一次築港工事が竣工した。県の記録に功勞者として顕彰された姓名の中に、遊佐快真の名が出てくる。浅草蔵前に医院を開いていたとは言い条、一貫して医療を続けてはいなかったに違いない。年齢も六十代の後半であり、決して若くはない。恐らく、浦戸―寒風沢経

由の郵船による海路、塩釜―東京の往復だったろうが、東京でも塩釜での盛名を恥ずかしめるものでなかったことは、二代目快真の力量を示すものであったろう。

快真のあとは寿助を襲名し、寿助は三代続いている。初代快真から数えて四代目の寿助は、第二次世界大戦中、宮城県の統合された薬業会社の初代社長をつとめ、抱擁力の大きい温厚な紳士であったが、総会の折には強い決断をもって事に当たると、昭和四十八年刊行の宮城県薬政史に大内市郎氏が書いている。この四代目寿助の長男は

京都薬専を出て、京大で生薬学の研究中に三十一歳の若さで亡くなった。

その後、どのような因子がからみあったのか推測は控えたいが、新しい時代、殊に東洋医学興隆の気運にも積極的にはのろことが出来ず、却って、前述したような流離の傾斜を迎えることになった。

今、塩釜神社博物館の収蔵庫に、嘗て店舗の象徴であり、木版となっても全国に知られた標の一枚板、縦長、金文字の看板が保存されている。訪ねて埃を払う人がいることを聞くのは、何年に一回であろうか。

(宮城県塩釜市東玉川町二ノ二九)